

子供時代、「ふるさと」神岡＝田舎」だった。テレビのCMで宣伝される商品は近所の店屋にはなかった。テレビで見る遊園地やお子さまランチ、学校の帰り道に見上げる飛行機も、私の憧れだった。中学時代、私の髪型をたしなめる母の言葉が嫌いだった。「そんなガオロみたいな頭をしたら、近所の人に笑われるのは母ちゃんや。」事の是非を、自分の価値観でなく、「近所」という借り物で叱責する母も嫌だった。

故郷に対する気持ちに変化が生じたのは大学四年のときだ。後に五六豪雪と名付けられた大雪。それまで、帰省の度に車窓から眺める雪色は懐かしく愛しい存在だったが、その時ばかりは自然の脅威を見せつけた。下ろした町中の雪の行き場が決まらず、屋根の雪下ろしは町当局から止められた。やっと許可が下りたのは、午後遅くだった。初めて二階屋の大屋根に上がり見渡したその時の風景を、私は今も覚えている。寸断なく雪降る夕闇の中、町中の人々が黙々と雪下ろしをしていた。家族総出で雪と闘っている姿であった。ふと、先祖から飛騨人はこうして生きてきたんだなと、と思った。いとおしさと同時にそのたくましさを感じた。

大学卒業後私は教員となり、ふるさとで暮らし続け三十年以上が経つ。便利さや気ままな生活を望んだ私の、ふるさとに対する気持ちは変わった。ふるさとには先祖伝来生きてきた土地とのつながり、人々との関わりが根底にある。自然の脅威と向かい合うからこそ、その恩恵に預かる。誰もが平等に、規律や規範を守るから、地域の連帯感が生まれ、安全で安心な町づくりにつながる。そして、より豊かな生き方を求め、誰もがふるさと作りに参加し、ふるさとを引き継いでいくのだ。

この町にも高齢化・過疎化の波が押し寄せている。来春には定年を迎える私であるが、だからこそこれまでと異なる関わり方で「ふるさととのつながり」が持てるはずだ。